

17世紀後半～18世紀前半のロシア語における 形動詞・副動詞構文

向山珠代

はじめに

ロシア語史には、歴史文法と標準語史という二つの研究分野が含まれる。これら二つの分野は相互に補い合う関係にあるはずのものであるが、実際には、あまり接点を持たずにいるというのが現状であろう。ごく大雑把な言い方をしてしまえば、前者は主に17世紀までのロシア語を対象に、様々な文法カテゴリーにおける音韻や形態の変化を記述する。10世紀末から11世紀にかけてロシア語に強い影響を及ぼした南スラヴ語的要素がロシア語のなかでどのように変化していったのか、あるいはその後の過程でいかにして異質な言語要素が同化されていったのかを、東スラヴ語の方言研究、比較研究に依拠しつつ検証しようとするのが歴史文法である。

それに対し、標準語史の主な対象は18世紀以降の書き言葉としてのロシア語（特にその文体）であり、そのなかで、現代ロシア標準語の形成過程においてフランス語をはじめとする諸外国語の及ぼした影響が考察される。そして、とりわけ大きな論争点となってきたのが教会スラヴ語がロシア語に及ぼした影響に関する問題であり、様々な、時には相容れないような主張が繰り返されてきた。

18世紀、特にその初頭から半ばにかけてのロシア語の変化と、現代ロシア語にもつながる基本的な構文体系の形成過程は、一体どのような枠組みのなかで記述されるべきなのだろうか。また、M.V. ЛомоносовやV.K. Тредиаковскийに代表される当時の文人たちが交わす言語論争—その多くは教会スラヴ語とロシア語の音韻・形態、そしてとりわけ語彙に関するものだったのだが—をどう理解すればいいのだろうか。この時代のロシア語を扱った先行研究は少なくないのだが、それらのなかでは「教会スラヴ語」「官庁語」「ロシア語」等の言語史上の用語が未定義のまま恣意的に用いられることが多かった。そしてこの時期のロシア語の混乱と変化は、これらの用法・文体・語彙が混合したため、或いは諸外国語の強い影響を受けたために生じたと一般に言われてきた。また、当時の言語論争も、解釈に曖昧さを残したまま、無批判に扱われてきたのである。

だが、この時期、社会的な変動に伴ってロシア語に生じた変化は、単に語彙や文体レベルにおけるものにとどまらない。中世ロシア語と18世紀の書き言葉としてのロシア語に僅かなりとも接したことのある者なら誰でも、この時期にロシア語が構文面においても急激な変化を蒙ったという印象を受けるのである。A.V. Исаченкоは「18世紀半ば、ロシア標準語は、フランス語の影響のもとに完全に新しいものとして形成されていった」と述べているほどである¹⁾。

1 A. Issatschenko, "Vorgeschichte und Endstehung der modernen russischen Literatursprache," *Zeitschrift für slavische Philologie* 37:2 (1974), pp.235-274. 但し Исаченкоは、従属接続詞の多くにフランス語の影響が

1996年に出版された V.M. Живовの『18世紀ロシアにおける言語と文化』²⁾は、実証的な検証を基に上に述べた用語上の問題点をより明確にしたという点からも、この分野における画期的な著作である。彼は18世紀に対する多年の深い関心をうかがわせる態度で、当時の重要な文献の校訂の過程を綿密に調べるといふ実証的な方法論を採る一方で、またそれと同時に、標準語形成に関する議論を広く文化論的な視野のなかで捉えようとしている。同書はロシア語史・文学史におけるこれまでの空隙をある程度埋めるような役割を果たしていると言っても過言ではない。だがこの著作では年代を追うかたちで様々な要素に関する包括的な記述がなされており、まさにそのために、「ロシア語はこの時期に本質的な変化を蒙っているのだろうか、もしそうだとすれば、それは、いかなる文法カテゴリーにおいてより顕著に認められるのだろうか」という疑問は、同書を読んでも解消されないままに残る。

本稿のテーマは、17世紀後半から18世紀半ばにかけての書き言葉としてのロシア語における形動詞構文と副動詞構文である。形動詞・副動詞は形態的には共に古教会スラヴ語の分詞³⁾に由来する。だが、教会スラヴ語、混成的教会スラヴ語⁴⁾あるいは中世ロシア語の構文体系上で形動詞と副動詞が占めていた位置を、18世紀半ばの一特にЛомоносовによって規範化されたロシア語の—それと比べてみると、後述するように、著しい変化が認められるのである。特に副動詞構文が蒙った変化はより本質的なものである⁵⁾。故に、形動詞・副動詞構文は、この時期のロシア語に生じた急激な変化を記述するための枠組みとなりうるのではないだろうか。また、そのような観点に立つなら、従来、いわゆる「三文体説」の表明として理解されてきたЛомоносовの著作を—そして彼がロシア語に及ぼした影響を一別の側面から再評価できるのではないだろうか。これらが本稿で主張したい点である。

教会スラヴ語の分詞主格形のなかには、名詞に同格的に置かれると同時に動詞の表す行為に付随する第二義的な行為を表し、いわば第二述語として半述語的な役割を果たすものがある⁶⁾。このように用いられた分詞短語尾形の、主語との性・数における形態的な一致は、かなり早い時期に⁷⁾の失われはじめる。それに伴って分詞短語尾形の同格語的性格は失われ、動

認められることを根拠にそのように論じている。また、この時期のロシア語のシンタクスが—とりわけ従属文の形成法とその主文との位置関係が—どの程度フランス語に依存していたのかを検証したものとしては Hüttl-Folter の優れた研究書がある。この著作に関しては以下でも触れる。G. Hüttl-Folter, *Syntaktische Studien zur neueren russischen Literatursprache. Die frühen Übersetzungen aus dem Französischen* (Wien-Köln-Weimar: Böhlau Verlag, 1996).

2) Живов В.М. Язык и культура в России XVIII века. М., 1996.

3) ロシア語では «причастие» であるが、本稿では、形動詞・副動詞との区別をつけるため、教会スラヴ語に関してはそれを「分詞」と呼び長語尾 (definite) か短語尾 (indefinite) かを付記した。

4) Живов. Язык и культура в России XVIII века. С.24.

5) 本稿では、教会スラヴ語の副動詞に関しては Смотрицкий の『スラヴ語文法』、中世ロシア語に関しては Потеебня による記述を比較の目安にしている。Смотрицкий М. Грамматика. Original(ly) published: М., 1647-1648; Потеебня А.А. Из записок по русской грамматике. Т.1-2. Харьков, 1888. С.185-231. また混成的教会スラヴ語に関しては本稿でとったデータをもとに判断する。

6) 例えば Он встав и рече,... や Оутрудихся зовы, я Клянхуся зобуще... 等の文。その多くは短語尾。「同格」「第二述語」の用語は Потеебня (前注 5 参照). С.185. や *Витаутас Амбрасас*. Сравнительный синтаксис причастий балтийских языков. Вильнюс, 1990. С.66-67. に倣った。

7) Потеебня (前注 5 参照) によれば 12 世紀末あるいは 13 世紀初頭に、Горшкова, Хабургаев によればそれ以前に。Горшкова К.В., Хабургаев Г.А. Историческая грамматика русского языка. М., 1981. С.351-357.

詞的な性格がより強まっていった。(中世ロシア語においてはそれらは半述語的に用いられるようになる。)他方、分詞長語尾 (definite) が本来もっていた名詞との結びつきはより強まり、あるものは形容詞化していった⁸⁾。

つまり、形態的にはともに古教会スラヴ語の分詞に由来する形動詞と副動詞は、ロシア語のなかで、かなり早い時期から異なった役割を与えられ、個別の発展過程を辿ってきたといえる。この二つを同じ論文のなかで扱おうとするのは、ひとつには、Ломоносов がロシア語に与えた影響がこの二つの文法カテゴリーに顕著に現れているからであり、またひとつには、18世紀に形成されたロシア標準語を、教会スラヴ語や中世ロシア語との継続性という観点から考察する際に—或いはフランス語からの影響を検討する際に—それらがともに有効な指標となりうるのではないかと思われるからである。

本稿におけるような課題を扱う際に—つまり、ある程度幅を持った一定の期間に、ある言語の構文体系上に生じた変化を具体的なテキストを基に検証しようと試みる際に—必要なのは、可能な限り継続性をもった資料を分析することだろう。そのために本稿では、まず、教会スラヴ語の詩篇と、近世におけるその改作をみていきたい。これらを考察の対象にすることによって、中世ロシア語における異種の慣用的な用法が入り込んでいる可能性を考慮に入れずに、教会スラヴ語をロシア語で書き換えようという改作者たちの共通の意図を前提として、それらのテキストに共通する特徴的な要素を見出すことが可能になる。そして、次に、それらの要素を、18世紀前半におけるフランス語からの翻訳文献やロシア語による修辭的な著作のなかの要素と比較した。この際にも当時の非常に文語的な著作のみを比較の対象にしている。

1. 教会スラヴ語の詩篇とその改作

上に述べた本稿の主張の論拠となる具体例を見る前に、本題からは多少逸脱するが、教会スラヴ語の詩篇とその改作が近世ロシア語史において重要な位置を占めていることについて簡単に触れておきたい。

古代～中世ロシアの人々は、教会スラヴ語を学ぶ際、詩篇を教科書のように用いていたことが白樺文書などからわかっている。文法書を介さずに、詩篇あるいは祈祷書を一音節ずつ丁寧に辿ることに始まり、詩篇を正確に暗記することに終わるのが当時の読み書き教育だった。このように暗記されたテキストの特徴は、当然、新たに作成されるテキストにも反映される。

このような、詩篇や祈祷書を暗記させるという教育は18世紀半ばになっても行われていた。(但し17～18世紀においては文法書が—М. Смотрицкийの『スラヴ語文法』が—かなり広く用いられていたようである。同書は1721年にФ. Поликарповによって再版されている。しかし、文法書はあくまでも詩篇や祈祷書を暗記し終えた者が参照するべきものと考

8 Горшкова, Хабургаев(前注7参照)によると、中世の官庁語文献のなかでは動詞性を残した形動詞はほとんど用いられていないという。

えられていた⁹⁾。

Г.А. Гуковскийは次のように述べている。「詩篇は古来ロシアにおいて最も普及していた書物のひとつであり、18世紀においてもその権威が損なわれることはなかった。詩篇は、詩集として最も好んで読まれていたと言っている。芸術としてじかに鑑賞されたのである。そして18世紀の芸術的思考に計り知れない影響を与えた¹⁰⁾」。

また А. Левитскийの考察によると、ロシア正教会の礼拝において中心的な位置を占めていた詩篇の受容は、ロシア語の詩学原理と密接に結びついている¹¹⁾。

18世紀は、ラテン語による修辞学講義が行われ、詩想の題材はギリシア・ローマ神話から採られていた時代である。西欧の影響を多分に受けた18世紀の知識人たち、古典文学・フランス文学の規範に沿ったロシア文学を創り出そうと努めていた当時の文学者たちのほとんどが、当時、教会スラヴ語の詩篇の改作に非常に熱心に取り組んだというこの事実は、おそらく、当時、ロシア語の新しい詩学原理が模索されていたことと無関係ではない。

1743年、新しい作詩法を巡る論争がきっかけとなって、Тредиаковский, Ломоносов, А.П. Сумароковら三人によるいわば詩の「競演」が行われた。それぞれが改作した詩篇第143篇を、作者の名を記入せずにひとつの文集としてまとめ、教会スラヴ語によるオリジナルも付した上で出版し優劣を競った。新しい詩学体系(силлабо-тоническое стихосложение)の脚韻を巡る論争が、詩篇改作という形で表面化したのである。

教会スラヴ語による詩篇をロシア語で書き換えるという試みが流行したのは、特に17世紀後半から18世紀前半にかけてである。1680年のСимеон Полоцкий、1683年のАврамий Фирсов、1730年代にはА. Кантемирが、1753年にはТредиаковскийが、詩篇全篇を内容にほぼ忠実なかたちで訳しているほか、1787年にはСумароковの大幅な解釈と削除を行った自由訳が出版されている(書かれたのは18世紀半ばと考えられる)。また、Ломоносовも、十編足らずではあるがロシア語に改作し、彼の主要な業績のひとつ『修辞学入門』のなかに例として載せている。

ここでは、まず、1580-81年に印刷され広く普及していた教会スラヴ語の聖書、Острожская библияの詩篇と、17世紀後半から18世紀半ばにかけて書かれた詩篇改作を取り上げたい。前述のЖивовは、18世紀に形成されていったロシア文章語は、これまで考えられてきたように中世ロシアにおける官庁語や口語の基盤の上に形成されたのではなく、むしろ教会スラヴ語・混成的教会スラヴ語との間に継続性が認められることを指摘したが¹²⁾、彼の結論は疑問を差し挟む余地のないものである。そのような観点からも、詩篇と、混成的教会スラヴ語で書かれたその改作¹³⁾を分析資料とすることの正当性が導かれるように思われる。

9 Живов. Язык и культура в России XVIII века. С.22-24.

10 Гуковский Г.А. К вопросу о русском классицизме // Поэтика. 1928. №4. С.139.

11 Левитский А. Предисловие // Vasilij Kirillovic Trediakovskij, *Psalter 1753* (Paderborn, 1989), pp.xi-lxxviii.

12 Живов. Язык и культура в России XVIII века. С.15-157.

13 ここで取り上げる詩篇改作の序文には、一般民衆にも内容がわかるように平易なロシア語で書いた、などと謳われている。だが、ここには多くの教会スラヴ語的要素が含まれているため、これらは混成的教会スラヴ語で書かれているとみなすことができる。

扱ったのは次の三つの改作である（オリジナルと厳密に対応していないСумароковの改作はここでは検討の対象にしなかった）。

- (1) *Симеон Полоцкий* (以下 С.П. と略す) Псалтирь 1680
- (2) *Аврамий Фирсов* (以下 А.Ф. と略す) Псалтырь 1683 года в переводе Авраамия Фирсова. Е.А. Целунова. München. 1989
- (3) *В.К. Тредиаковский* (以下 Тр. と略す) Псалтирь 1753. Vasilij Kirillovic Trediakovskij, *Psalter 1753* (Paderborn, 1989).

1.1. 詩篇における教会スラヴ語の分詞。その書き換え

詩篇が書き換えられる過程における教会スラヴ語の分詞構文の変化について調べるために行った作業を簡単に説明すると以下ようになる。

- (1) Острожская библияの詩篇全150篇の中から、形容詞化していない、つまり動詞性を残し統語的に他の語を支配している分詞をすべて取り出し（569例）、
- (2) それらをまず主格と斜格に分けたうえで、長語尾 (def.) か短語尾 (indef.) かに従って分類した。
- (3) 次にそれらを上記の三つの詩篇改作中の該当個所と照らし合わせ、教会スラヴ語の分詞がどのように表現されているか—形動詞のままか、関係節で置き換えられているか、動詞化しているか、あるいは、文脈上、明らかに副動詞化していると認められるか等の項目別に一統計をとった。

1.1.1. 主格・長語尾(def.) (教会スラヴ語の分詞 246例)

教会スラヴ語詩篇 (以下 ц.-сл. と略) とその書き換えの例：

- ① ц.-сл.: възвеселатса вси оуповающей на тя, ... похвалатса о тебе вси любящей имя твое, (5-12)¹⁴
 → С.П. веселатса иже оуповають (関係節化) ... иже има ти ... любятъ (関係節化)
 → А.Ф. тїи возвеселятса, иже оуповають (関係節化) ... возрадуются в тебе, которые любятъ... (関係節化)
 → Тр. надѣющісяжъ на тя (形動詞) ... всѣ възлюбившіи твое... имя (形動詞) .
- ② ц.-сл.: и не прегрѣшатъ въси оуповающей на нь. (33-23)
 → С.П. вси иже тцатса ... оуповати, не могутъ ... согрѣшати. (関係節化)
 → А.Ф. вси которые уповают (関係節化)
 → Тр. На Бога всякъ надежный (名詞類化)
 (Ср.: ц.-сл. (83-13) → Тр. на Тя-кой уповаеть. (関係節化))

14 Острожская библияの詩篇には篇番号等は記されていないので、便宜上、対応するギリシア語七十人訳聖書の篇・節番号を付した。

- ③ ц.-сл. : стужающеи ми възрадуотса, (12-6)
 → С.П. то возвеселатса, иже ... стужати ... тщатса. (関係節化)
 → А.Ф. дабы врази мои(名詞化) не радовалися.
 → Тр. Да, и стужаючи мнѣ всѣ(形動詞主格短語尾) , не...

- ④ ц.сл. : аще есть разумѣвали, или взыскали бога (13-2)
 → С.П. есть ли кто ... знай(その他¹⁵) , или бога взыскаай(その他)
 → А.Ф. хотя видѣти, есть ли вних разумной(名詞類化) , и ищущи бога(形動詞) .
 → Тр. Есть ли кто-разумѣвающъ(その他) ... или и Господа взыскающъ(その他)

主格・長語尾の分詞には決まった形で頻出する表現も多く、それらは改作中でもそのまま用いられる場合が少なくない。その一方で、上に挙げた例のように、教会スラヴ語の分詞構文が極めて意識的に関係節化されている例も非常にしばしば見受けられる。また、以下に挙げる分析結果をまとめた表からは読みとれないが、教会スラヴ語における主格の分詞の大半は(先行詞を修飾しているのではなく)主文の主語として用いられている。だがそれらの多くは、例えば18世紀のТрeдиакoвскийの改作の中では名詞化される傾向にある。

	形動詞 長	短	関係節化	動詞化	名詞化	副動詞化	その他	計
С.П.	89	1	88	32	28	5	3	245
А.Ф.	90	0	93	32	24	2	4	245
Тр.	66	2	69	48	52	3	6	246

1.1.2. 主格・短語尾(indef.) (教会スラヴ語の分詞 105例)

- ① ц.-сл. : и яко скимень обитаа въ скровищихъ. (16-12)
 → С.П. и яко сквмень в тайных приобыкшии жити(形動詞)
 → А.Ф. иже укрывается в ямѣ(関係節化) .
 → Тр. Скiмень скрившись такъ алкаетъ(副動詞)

- ② ц.-сл.: сѣда на брата своего клеветаше, (49-20)
 → С.П. брата твоего сѣда клеветаше(副動詞) ,
 → А.Ф. Сѣдя на брата своего клеветашеш(副動詞) ,
 → Тр. На брата сидя ты клеветашеш(副動詞)

- ③ ц.-сл.: ..., и обращъ оживиль ма еси, (70-20)
 → С.П. ты же обращса ко мнѣ(副動詞) ,
 → А.Ф. но обратятся, паки оживил еси(副動詞) .

15 このような関係代名詞+形動詞(長語尾或いは短語尾)のような形はこの時期の文語にしばしば見受けられる。ここでは「その他」として分類したが、以下で副動詞の変則的用法とともに再び取り上げる。

→ Тр. Но обратившись..., Мя паки оживотвориль (副動詞)

④ ц.-сл.: ..., метающе сѣмена своа. (125-6)

→ С.П. сѣмена метающе (形動詞主格短語尾) ,

→ А.Ф. А которыя ... носяще сѣмена свои, тїи... (その他)

→ Тр. Толь плакали тамъ рассѣвая (副動詞)

改作中の、主語 + 副動詞、接続詞+ 副動詞のような形が目される。

なお、主格の形動詞短語尾と副動詞は文脈によって一つまり、文中の名詞にかかりその行為を特徴づけているのか、それとも、動詞で表されている行為に付随する第二義的な行為を表しているのかによって一區別される。ここで注目しておきたいのは、教会スラヴ語の分詞短語尾は、その半数近くがロシア語では動詞で置き換えられているということ、また、副動詞化していると認められる場合も、単独で主動詞に前置あるいは後置され副詞的な役割を果たす副動詞がほとんどであるということ、更に、それらのなかには現代ロシア語では許容されない用法が決して少なくないということである。これらについては後述する。

	形動詞 長	短	関係節化	動詞化	名詞化	副動詞化	その他	計
С.П.	22	5	9	45	7	14	3	105
А.Ф.	7	3	8	50	22	13	2	105
Тр.	4	2	2	45	32	18	0	103

1.1.3. 斜格・長語尾(def.) (教会スラヴ語の分詞 207例)

① ц.-сл.: Благословлю господа вразумившаго ма, (15-7)

→ С.П. Благословлю господа разумъ ми подавша (形動詞斜格短語尾) ,

→ А.Ф. Добрословлю господа вразумившаго мя (形動詞) ,

→ Тр. Господа благословлю, Мнѣ подавшаго (形動詞) совѣты,

② ц.-сл.: (Пролей гнѣвъ...) на языкы не знающаа тебе (78-6)

→ С.П. иже бога та не знаютъ (関係節化) ,

→ А.Ф. на поганя, которыя не знаютъ тебе (関係節化) ,

→ Тр. На языки..., Кои-Тя-весьма не знаютъ (関係節化) ,

③ ц.-сл.: Не ненавищаа ли та господи возненавидѣх, (138-21)

→ С.П. не въ ненависти тїи блху, иже ...ненависти навлаху (関係節化)

→ А.Ф. аз тѣх не имѣл в ненависти, которыя тебе ненавидят (関係節化)

→ Тр. Яжъ ...всѣхъ ненавижу, Къ Тебѣ въ-которыхъ-злобу (関係節化)

教会スラヴ語の分詞長語尾は、主格と同様、斜格に於いても、かなり意識的に関係節で置き換えられていることが上に挙げた例から見て取れる。だが、斜格の場合には、同格的な用法のような曖昧な要素がなく修飾関係が明確だからであろうか、形動詞のまま残されている場合も比較的多かった。なおごく少数ながら用いられている斜格の形動詞短語尾は詩的逸脱とみなしていいだろう。

	形動詞	長	短	関係節化	動詞化	名詞化	副動詞化	その他	計
C.П.	101		15	58	9	24	0	0	207
A.Ф.	104		1	56	27	18	1	0	207
Тр.	68		3	37	35	62	1	1	207

1.1.4. 斜格・短語尾(indef.) (教会スラヴ語の分詞 11例)

この11例には、絶対与格構文やギリシア語の不定詞構文に対応するものなどが含まれる。そのためそれぞれの改作に於いても構文が大きく変えられており、統計をとった結果もばらついている。用例数は少ないが、それでも、ここから、C.П.の改作では教会スラヴ語を踏襲するかたちで用いられている斜格における形動詞短語尾は、18世紀にはほとんど用いられなくなっていくという結論を導くことができる。

	形動詞	長	短	関係節化	動詞化	名詞化	副動詞化	その他	計
C.П.	0		6	3	2	0	0	0	11
A.Ф.	1		2	2	3	2	1	0	11
Тр.	3		0	0	6	2	0	0	11

1.2. まとめ．形動詞・副動詞の用法の特徴

上に述べたこととも重複するが、ここでは次のフランス語からの翻訳文献と Ломоносов の著作への言及とも関連する幾つかの点に関して、教会スラヴ語の詩篇とその改作の特徴をまとめておきたい。①詩篇をわかりやすいロシア語で書き換えようという動きのなかで、教会スラヴ語の分詞長語尾は、極めて意識的に、関係節などで置き換えられている。②教会スラヴ語の分詞長語尾の大半は一予備的な調査によればその8割は一主文の主語あるいは補語となる名詞句として用いられている。つまり、現代ロシア語におけるような、先行詞を修飾し節を構成するような用法は、決して、主要な用法ではなかったのである。③主格における分詞短語尾のうち、改作中で副動詞として用いられていたのは15%ほどで、多くの場合は一約半数は一動詞化している。副動詞も、そのほとんどは単独で動詞に前置または後置され、いわば副詞的に用いられているか、或いは接続詞+副動詞、主語+副動詞のようなかたちをとっているかのどちらかの場合がほとんどである。つまり、教会スラヴ語→ロシア口語の影響を受けた混成的教会スラヴ語という流れからは、現代ロシア語にみられる従属節を構成するような副動詞の発展過程を辿ることはできない。それは Смотрящий の『スラヴ語

文法』—これは、恐らく、教会スラヴ語の分詞短語尾の多くの用例から幾つかの規則を導いたものであろうが—を見ても、後述する Потебняの記述を見ても明らかだろう。ここで参考のために Смотрицкийの『スラヴ語文法』を見ておきたいのだが、あまり引用されることのない著作なので、副動詞に関する記述の一部を、例文とともにほぼそのままの形で以下に挙げた。同書は中世～近世ロシアにおけるほとんど唯一の文法書として18世紀に到るまで実際に用いられていたものである。ここに挙げられているのは副動詞の同格的用法と思われるが、このような用法は、前述のように、ロシア語のなかではかなり早い時期に失われた。以下の例文中の副動詞の用法は、現代ロシア語のそれと共通点をほとんど持っていない。

参考. М.Смотрицкий 『スラヴ語文法』より「副動詞. その統語法」

【ω глаголь. Оувѣщеніе ω дѣепричастіихъ.】(л.198-212.)

副動詞は、形動詞の語尾を縮約したり省略したりすることによって簡略化したものであり、その意味も形動詞に依っている。そして、意味的には、形容詞短語尾形が長語尾形と異なるのと同じように、形動詞と異なっている。全ての性・数に於いて主格以外の格を欠いている。(…)

【ω снѣзѣи. ω сочиненіи дѣепричатіи.】「副動詞の統語法について」(л.312-313.)

[規則 1] 副動詞はもとの動詞と同様の格を支配する。例 ①Вида разбойникъ—началника жизни на крестѣ висаща. ②Изгнанъ бысть Адамъ из раа аггеломъ, дѣлаше землю. ③Рци ми, какω возриши на солнце непоклонивса посылающему очесемъ твоимъ свѣтъ. ④какω, причастишиса трапезѣ непоклонивса толикихъ глаголь подателеви.

[規則 2] 副動詞はそれが付加される動詞に性・数・人称が一致する。例 Оутрудихса зовы. Вопіастѣ глаголющѣ. Кланухуса зовуще. Текоша рыдающе. 動詞 есмь と共に用いるほうがよい。例 Бысть шоумъ, и исполни домъ, идѣже баху оученици сѣдаще, и стоаща быша ноги наша во дворѣхъ твоихъ іеросалиме.

[規則 3] 副動詞は、ギリシア語では分詞であるが、スラヴ語に於いては精神の状態を表すような動詞に付加されて不定詞の代わりに用いられることがある。例 Азь же господи оуповаа боуду на та, и на нь надѣюще боудем (оуповатиの代わりに副動詞). Оумъ непрестаеъ лукаваа ми помышленія рода (родитиの代わりに副動詞).

[規則 4] 副動詞は、名詞によって文を構成し、統語法は形容詞のそれに従う。例 Зовы измолче гортань мой. И далікоствоуеъ бесплотныхъ оумовъ естество, почитающе святое торжество божія матере.⁽¹⁶⁾

2. 副動詞の変則的な用法

では次に、上記のまとめの③でも触れた副動詞の用法についてより詳しく見ていきたい。詩篇とその改作を検討する過程で見えてきたのは、教会スラヴ語のとりわけ短語尾の分詞に

16 Смотрицкий М. Грамматика. Original(ly) published: М., 1647-1648. 尚、Смотрицкийによる副動詞の記述は、Сильвестр Медведевの文法書でも繰り返されている。Виноградов В.В. Очерки по истории русского литературного языка XVII-XIX вв. М., 1938. С.15.

典型的な、同格的・第二述語的用法は、ロシア語には定着せず、動詞または副詞的な副動詞に書き換えられているということ⁽¹⁷⁾、さらに、17世紀から18世紀にかけての副動詞には、いわば変則的に用いられているものが少なくないことであった。つまり、繰り返しになるが、教会スラヴ語→ロシア口語の影響を受けた混成的教会スラヴ語という流れからは、現代ロシア語にみられる、従属節を構成するような副動詞の発展過程を辿ることはできない。

例えば、以下に挙げるのはいずれも詩篇改作の中から拾った例文なのだが、現代ロシア語で副動詞をこのように用いるなら、それは文法的な誤りとみなされる。(便宜上、原文の表記の一部を簡略化している)

[主語をもつ副動詞]

- ・ Ты же обращаешься ко мне, (С.П. 70-20)
- ・ Ибо он отмщая кровь их помянул, (А.Ф. 9-13)
- ・ Врагов поверженных мы видя пред собой⁽¹⁸⁾ (Сумароков. 詩篇第 19 篇)

[動詞と副動詞節が並列接続詞で結ばれている例]

- ・ ожидает како бы..., и похитя его, влечет... (А.Ф. 9-30)
- ・ Забыл еси мене, и чесо ради ходя сетую... (А.Ф. 41-10)

[関係代名詞 + 副動詞 (或いは形動詞)]

- ・ есть ли кто ... зная, или бога возыскай (С.П. 13-2)
- ・ которых узрев мене, бежали... (А.Ф. 30-12)
- ・ Есть ли кто-разумевающ ... или и Господа взыскающ. (Тр. 13-2)

[述語としての副動詞]

・ сіе ж, иньи как-от-навыка к борзому прочтению Псалмов, воздух токмо бія своими изглашениями без разумения, так други и от пренебрежения, слыща ежедневно их читаемых, и тем бутто б некоторую в них сытость собою вложивших, и дающих уже увет к отвращению от многократного повторения⁽¹⁹⁾.

[絶対構文的な副動詞] (副動詞の主体が主文の述語と一致しない例)

- ・ Премудростью полна пустая мня глава, / И что божественны их дутыя слова (Сумароков. 詩篇第 72 篇)

17 現代リトアニア語の形動詞はこのような用法をもっている。Ambrasasによると形動詞の用例の約半数は修飾語的ではなく同格的に用いられているという。この二つの用法は文脈によって決定されるため、それらを厳密に区別することは難しいが、例えば *tevas parejes namo / atsigule paliset (отец пришедший домой / лег отдохнуть)* と言うときの息の休止は、/の部分で一度だけとられる。このような用法は同格的である。Ambrasas. Сравнительный синтаксис... (前注6参照) С.98, 特に С.109.

18 Сумароков А.П. Полное собрание сочинений, в стихах и прозе. Часть 1. М., 1787.

19 Тредиаковский В.К. Псалтирь 1753. Vasilij Kirillovic Trediakovskij, *Psalter 1753* (Paderborn, 1989). С.6.

現代ロシア語における副動詞節は、①決してそれ自体の主語をもつことができない⁽²⁰⁾、②副動詞の主体は主文の主語と一致する⁽²¹⁾、③副動詞節は従属接続詞を取らずに従属節を形成する⁽²²⁾、また従属節を形成する以上、動詞と並列接続詞で結ばれることはない等の統語論上の原則をもっている。17世紀から18世紀にかけての文献中、この原則から逸脱している用例は決して少なくないのだが、それらはしばしばアルカイックな要素の痕跡、方言的、フォークロア的な要素と説明され、或いは単に作者が文法的な誤りを犯したとみなされ、これまで、それほど注目されてこなかったようである。だが、上に挙げた詩篇改作の中の例を見るなら—そしてそれらが非常に教養の高い人々によって書かれたものであることを考えあわせるなら—この時期のロシア語の副動詞にはまだ、現代ロシア語の観点からすると異質な要素が含まれていたとすることができるだろう。

では、これらの異質な要素はロシア語の発展過程の中でどのように位置付けられるのだろうか。また、現代ロシア語の副動詞の統語論上の原則はどのようにして生じたのだろうか。フランス語の *gérondif* の影響として説明されうるのだろうか。

3. フランス語からの翻訳文献中の副動詞

フランス語の *gérondif* は <en+現在分詞> の形で表され、副詞的に文を修飾する。また、名詞や代名詞を前置して意味上の主語を表示することはできず、それは原則として主文の主語と一致する。その用法は、現代ロシア語の副動詞の用法とかなり共通性をもっているように思われる。

前注1でも触れた G. Hüttl-Folter は、Исаченкоと同様に、18世紀に成立したロシア標準語は、特に統語面でフランス語の強い影響を受けて新たに形成されていったという立場をとっている。彼女は『近代ロシア標準語の統語論研究』において、18世紀初期の翻訳文献を原文と対比させ、当時のフランス語の極めて修辭的で複雑な構造をもつ文がどのようにロシア語に翻訳されているかを、特に(時・条件・譲歩・結果・目的・様態等々すべての)従属文の形成法とその主文との位置関係に注目して綿密に統計をとっている。また、注目に値する用例には原文のフランス語を併記し、頻度も挙げている。彼女の立場には—つまりフランス語がロシア語の統語体系、構文体系に与えた影響が本質的なものだったという前提には—やはり疑問が残るものの⁽²³⁾、この著作は、18世紀初期のロシア語の状況を見る際に安心して依拠できるような、非常に優れた労作である。

そして、ここに挙げられているデータを見る限りでは、ロシア語の副動詞節の用法の規範がフランス語の *gérondif* の用法に倣って形成されたという結論を導くことはできないので

20 Gilbert Rappaport, "Deixis and Detachment in the Adverbial Participles of Russian," in C.V. Chvany and R.D. Brecht, eds., *Morphosyntax in Slavic* (Columbus, OH: Slavica Publishers, Inc., 1980), p.273.

21 Ицкович В.А. Очерки синтаксической нормы. 1-3 // Синтаксис и норма. М., 1974. С.43-106.

22 Gilbert Rappaport, *Grammatical Function and Syntactic Structure: The Adverbial Participle of Russian* (Columbus, OH: Slavica Publishers, Inc., 1984), p.11.

23 後述。なおこの点に関しては Живов も慎重な態度をとっている。Живов В.М. Заметки об историческом синтаксисе русского языка (По поводу книги: G. Hüttl-Folter, *Syntaktische Studien zur neueren russischen Literatursprache. Die frühen Übersetzungen aus dem Französischen* (1996) // Вопросы языкознания. 1997. №4. С.58-69.

ある。ロシア語の副動詞構文は、フランス語の不定詞構文などを翻訳する際にも用いられており、その表現の幅が *gérondif* よりもかなり広いことがこの著作からわかる⁽²⁴⁾。だがそれよりもむしろ、上に挙げたような、副動詞の変則的な用法が、フランス語の(絶対分詞構文の)影響のもとに、或いはフランス語に依存しないかたちでも、かなり頻繁に見受けられることにここでは注目したい。以下、幾つか例を引用しよう。

[主語をもつ副動詞]

- ・...подлинно, продолжая бы я зрение свое за солнцем..., увидел бы⁽²⁵⁾, ...(C.236)
- ・Порта увидевши, что..., учредила...(C.275)

[動詞と副動詞節が並列接続詞で結ばれている例]

- ・..., и не мысля его перевозоити, я... (C.228)

[関係代名詞 + 副動詞 (或いは形動詞)]

- ・...пресечь употребление тех опасных правил, которые привлекая к себе множество людей, подрывают... (C.229)
- ・...все те, которые ездя по всему свету, без всякого разсуждения... (C.232)
- ・...пары, которыя возшедши на воздух до некоторой высоты, там собираются... (C.236)
- ・Храбрыи сеи... нашол и свою, которую с позволения... взяв, вынюхал... (C.267)

[述語としての副動詞]

- ・Я спроста тот час им сказав, что... (C.267)

[絶対主格構文的な副動詞]

- ・..., вместо того что мы не имея уже..., наш фронт(主文主語) ... (C.229)

[主文主語とは異なる主体をとる副動詞構文] (Тредиаковскийに特に多いが、それらはフランス語の影響による)

- ・Употребил он..., а совокупившись[副動詞の主体は Persia](C.277)

Olga T. Yokoyama は、副動詞が主語をもつことができなくなった過程を次のように推測している⁽²⁶⁾。次の(a)のような副動詞構文は17世紀にはごく一般的に用いられていたが、現

24 例えば Кантемирは、フォントネルの『多数の世界についての会話』を訳した際、全200頁のなかで184例の副動詞構文を用いているが、そのうち *gérondif* に対応するのは50例である。G. Hüttl-Folter (前注1参照), p.273.

25 Hüttl-Folterはこの例を次のように説明している:「この副動詞構文は、原文とは異なり、それ自体の主語、*я*を含んでいる。それは主文の主体と同一ではあるが、主文のなかでは繰り返されていない。このような条件文は、例えば次の文のように、*Imperativ zu sein* と非現実話法の混成のように思われる。‘*приди я раньше, успел бы на поезд.*’ 主語をもつ副動詞の用例は Кантемирに多いが、このような現象にはフランス語は関与していない。pp.14, 236 参照。

代ロシア語ではそれは(b)のように言わなければならない。

- (a) Шед Яков, и виде мертвое его тело.
- (b) Пойдя, Яков увидел его мертвое тело.

この二つの文を比べてみると、「主語は、通常、副動詞節に含まれ、主文に於いては redundant として削除される」という一般原則が、17世紀から18世紀にかけて反転しているように見える。そしてこれは、この時期に（特に18世紀半ばに）ロシア語における主語としての人称代名詞の役割が変化したことと本質的な部分で結びついているような過程である。Yokoyama の考察はこのように要約できるだろう。

彼女は発話構造分析の立場からこのような結論を導いたと述べている。だが、ここには、①中世ロシア語における副動詞の多様な用法が考慮されていない、②(a)の副動詞がもっていたであろう半述語的特性（並列接続詞 и によって示される）が無視されている、などの幾つかの難点がある。また、この時期の人称代名詞の用法の変化は、翻訳文献の影響を受けて生じた、ある程度表面的な変化である。さらに、17世紀の文献を発話構造分析の立場から分析しようとする方法論にも限界があるように思われる。

以上、17世紀後半から18世紀前半にかけて、教会スラヴ語をロシア語に書き換えた文献の中でも、フランス語をロシア語に翻訳した文献の中でも、副動詞が、同じように、いわば変則的に用いられている場合があることを確認し、そして、それらについての幾つかの見解を簡単に見てきた。では次に、そのような用法がロシア語の発展過程の中でどのように位置付けられるのか、A.A. Потебняの見解が非常に興味深く思われるので、その簡単な要約を試みたい。

4. 副動詞の半述語的用法

Потебняの『ロシア文法覚書』には古代～中世ロシア語における分詞短語尾の用法に関する詳細な記述がある。彼の鋭い観察は、近年における Ambrazas の研究の中でも支持されている。Ambrazas の『バルト諸語の分詞比較統語論研究』²⁶⁾を読むと、バルト諸語（特にリトアニア語）が、非常にアルカイックな痕跡を根強く残しながらも、独自の分詞用法を発達させてきたことにまず驚かされるのだが、それを Потебня が挙げている用例と比較するとき、やはり、バルト語とスラヴ語は、歴史的にひとつの源から発し、かなりの程度に共通性をもっていた時期がかつてあったのではないかと思わざるをえない。そしてこのように考えるなら、上で〈変則的〉として挙げた17世紀から18世紀にかけての副動詞の用例は、ロシア語が、バルト諸語と並行するかたちで、独自に発達させてきた—或いはむしろ、ロシア語の中では未発達のまま廃れていった—用法の痕跡であり、つまり、当時の比較的緩やかな規範

26 Olga T. Yokoyama, "The History of Gerund Subject Deletion in Russian," in C.V. Chvany and R.D. Brecht, eds., *Morphosyntax in Slavic* (Columbus, OH: Slavica Publishers, Inc., 1980), pp.260-272.

27 Амбразас. Сравнительный синтаксис. (前注6参照) バルト諸語の分詞との関連については神戸市外大の井上幸和教授に指摘していただいた。

の中では、まだ許容されていた用法なのではないかと思われるのである。

ここではПотебняの見解を、本稿のテーマと直接関わる部分のみ、簡単にまとめてみたい⁽²⁸⁾。

[動詞と副動詞節が並列接続詞で結ばれている例]

古代ロシア語にみられる «(он) встав и рече» のような用例は、文が主語と述語という二つの中心をほとんど同等のものとしてもっていた古代の言語を反映しており、それは、バルト-スラヴ語が共有した言語の古層に属する。同格的分詞が copula とともに用いられているケースもあるが、上記の用例—古代～中世ロシアの文献中、決して少なくない用例—の中ではそれが省略されていると考えるべきではない。また、これが述語として用いられていると考えるのも誤りである。この接続詞 и が示しているのは、同格的分詞が、動詞ではなく主語を志向していたということ、主語に従属する項として、半述語的・第二述語的役割を果たしていたということであり、それがこの古い層に属する言語の特徴である。また、そうである以上、接続詞なしの結合 «(он) встав рече» における分詞にも同様の特徴を読みとるべきであろう。だがロシアにおいては同格的分詞の主語との形態的な一致は早い時期から失われはじめる。それに伴い動詞への志向性が強まっていった。このようにして副動詞というカテゴリーが形成されたのだが、それは現代ロシア語におけるそれとは異なり、第二述語的性格、ある種の独立性をもっていた。それは絶対与格構文や従属節が並列接続詞で結ばれていることにも示されている。だが、中世におけるこのような用法の原因は、文の連結性が未発達だったため、文の構成要素の結合に関する規範が形成されていなかったためであろう。

[関係代名詞+副動詞（或いは形動詞）]

このような用法—副動詞が代名詞に従属し第二述語的役割を果たしている用例—もまた、上に挙げた、バルト-スラヴ語が共有した言語の古層に由来し、同じように、その時代の言語の特徴を示している（現代においても кто хотя, что хотя, где хотя, куда хотя のような表現にこの痕跡が残されている）。つまり、古層に属する言語は、動詞が中心となって文をひとつにまとめあげるといった傾向を欠いていたため、このような半述語的な要素（萌芽状態にある文）を含むことができた。だが、スラヴ語においてはその後急激な変化が生じ、このような、文と従属項の中間的な存在を許容しなくなった。スラヴ語は、動詞性をそれほど強くもたない分詞は形容詞や副詞のカテゴリーに変え、他方動詞性の強い分詞は動詞定形に変え、従属文を構成させたのである。そしてこれは、文の様々な構成要素が区別され、文としての結束性が高まっていったということと矛盾しない。

[絶対主格構文的な副動詞]

絶対主格は絶対与格に比べ用例が稀なのだが、それを書き手の不注意と決めつける権利は我々にはない。当時の同格的な分詞はある程度独立性を持っていたが、それは、このような、独自の主語を持つ構文にも表されている。もし、副動詞のこのような用例の頻度がより

28 Потебня А.А. Из записок по русской грамматике. Т.1-2. Харьков, 1888. С.185-231.

高かったなら、それは誤用とはみなされずに、副動詞の絶対的用法として定着したことであろう²⁹⁾。それが誤用とみなされるに到ったのは、後の時代に於いて、副動詞がもともと持っていた性質、つまり、主語に同格的に置かれた分詞から形成されたという側面のみが一面的に把えられ規範化された結果としか考えられない。

* * *

以上、変則的な副動詞の中から、特に重要と思われる三つの用法に関する Потенбня の見解を挙げた。これを見ても、中世ロシア語における半述語的な副動詞がある程度の独立性をもち、ある種、不安定な位置にあったことがわかる。その後、ロシア語が書き言葉として規範化される過程において、このような不安定な要素をもっていた副動詞は、文の結束性をこわさない、状況等を表す副詞句をつくる副動詞に変えられていったのだろう。

では、現代ロシア語における副動詞の用法の規範はどのようにして生じていったのだろうか。それを明らかにするためには、17世紀から18世紀にかけての多くの文献を、一定の枠組みを設定した上で幅広く分析することがまず必要であろうし、また、他のスラヴ諸語との比較も有益な示唆を与えてくれるだろう。だが、その際に依拠できるような、統語体系の歴史的变化を記述するための方法論はまだ十分に論議されていないようである。

そのためごく表面的な記述になるが、最後に、Ломоносовの著作に関して少し触れておきたい。

5. ロモノーソフの文法と文体論

1696年に書かれたルドルフの文法書³⁰⁾が端的に示しているように、17世紀～18世紀初頭のロシアの言語状況は、外国人の目にはあたかも、教会スラヴ語とロシア語のいわば二言語使用状態 (diglossia) として映っていたようである。前述の Живов は、当時の言語を幾つかのいわば「言語域 (регистры)」に分けて考察することが必要だと述べている。ロシア語史における18世紀は、ロシア語が、このような状況から混乱期を経て標準語 (литературный язык) として確立されていく過程として記述される。そして、この過程に於いて、ロシア語を規範化し構文体系を整えるために非常に大きな影響を及ぼしたのが Ломоносов の『修辞学入門』(1747) と『ロシア語文法』(1755) である。

『ロシア語文法』には次のような記述がある。

「(形動詞による先行詞の敷衍の仕方を説明し多数の例文を挙げた後で) だがここで、これらの形動詞は、発音上も意味的にもスラヴ語と共通しているロシア語の動詞からしか形成されないということに注意を促しておかねばならない。形動詞は書き言葉のなかでのみ用いられ、会話のなかで

29 現代英語、フランス語などにもあるこのような用法は、中世ロシア、リトアニア語文献にもしばしば見受けられるのだが、後者のいずれにおいても、規範的な用法として定着することはなかった。Ambrazas は、述語としての役割を果たす分詞が動詞定形文に付加してこのような文が生じたのではないかと述べている。Амбразас. Сравнительный синтаксис. (前注6参照) С. 110.

30 H.-W. Ludolf, *Grammatica Russica, quae continet non tantum praecipua fundamenta russicae linguae, verum etiam manuductionem quandam ad grammaticam slavonicam* (Oxonii, 1696).

は、関係代名詞которой, которая, котороеを使わねばならない。低俗な動詞や会話のなかだけで用いられる語からはつくりたくないほうがいい、というのは、形動詞のなかにはある種の文体的な格調高さが含まれており、そのため、高尚な詩などに用いるのに相応しいものだからである。ロシア語をあまりよく知らない者—しかもスラヴ語の書物をほとんど読んだことがなく、従って形動詞の基本的用法を理解していない者—は、形動詞の代わりに関係代名詞と動詞を用いて書くのが無難かもしれない [§ 343]。

「外国語の用法の影響を受けて、副動詞の主体 [訳注：原文では лицо, 人称] を、人称動詞主語と切り離して用いている者がいるが、彼らは甚だ誤っている。なぜなら、副動詞の主体は、文全体の主要な意味を担っている主動詞の主語と一致させなければならないからである。例えば、Идучи въ школу, встрѣтился я съ пріятелемъ. Написавъ я грамотку посы-лаю за море. と書くべきところを、多くの者が遺憾にも次のように書いているのである。Идучи я въ школу, встрѣтился со мною пріятель. Написавъ я грамотку, онъ пріѣхаль съ моря. Будучи я удостовѣренъ о вашемъ къ себѣ дружествѣ, вы можете уповать на мое къ вамъ усердіе。これらの文は甚だ間違っており、ロシア語の正しさに敏感な者にとっては、嘆かわしい用法と感じられるのである [§ 532]。

「スラヴ語では、副動詞の代わりに形動詞の与格を用い、様々な人称において用いていたが、残念なことに、このようなスラヴ語特有の用法は我々の時代では既に廃れてしまった。例えば、Ходящу мнѣ въ пустынь, показался звѣрь ужасный。のような文のことである。とはいえ、そのような構文の痕跡はまだ残っており、ロシア語としても妥当な用法と認めることができる。例：Бывшу мнѣ на морѣ, восстала сильная буря。しかし、これ以外の用法は既に廃れてしまった。わたしが思うには、高尚な詩などにおいては、このような構文のある種のものならば、慎重に取り入れていってもいいのではないだろうか—もしかすると、我々の感覚がこのような表現に馴染み、そして、この失われた簡潔さと美しさをロシア語に取り戻すことができるかもしれない⁽³¹⁾ [§ 533]。

本稿でこれまで見てきた流れを念頭においてこの記述を読むと、ここにはЛомоносовの積極的な主張が表明されているのがわかる。ただ、彼は、文体論を理論としてではなく修辞学として著したので—或いは自ら実践することによって示したので—彼の主張はしばしば古典主義と同一視され、むしろ否定的に評価されてきた。だが、彼の、ロシア語による修辞学の導入と、その後一世紀にわたる修辞学教育が、Потебняの言い方を借りれば、「文の、文としてのまとまりに対する意識を高め、文の構成要素に明確な位置を与え、その用法を規範化するため」に決定的な影響を与えたことは明らかである。修辞学は基本的に模倣によって修得されるものなので、ここではこのような曖昧な言い方しかできないのだが。

Ломоносовをこのような側面から再評価することも本稿の目的のひとつなので、以下、多少煩雑になるが、彼の修辞的な著作の一部を引用したい (1751年9月6日、アカデミーの記念式典で行われた講演「化学の効用について」の一部である)。彼の文体論の中心にあっ

31 Ломоносов М.В. Полное собрание сочинений. Т.7. М.-Л., 1952. С.496-567. 本稿では詳しく触れないが、Ломоносовは他の著作でも教会文書すなわちスラヴ語の書物の重要性について言及しており、それは従来いわゆる「三文体説」の提唱とみなされてきた。だが、それらの言及は、すべて、この箇所 (§ 343) と同様に、形動詞の用法との関連においてなされている。

たのは形動詞、副動詞、関係代名詞であるが、形動詞には実線の下線を付し、副動詞は枠で囲み、関係代名詞には破線の下線を付してある。彼が非常に意識的に形動詞と副動詞の用法を示そうとしていることが見て取れる。

Химик требуется не такой, который только из одного чтения книг понял сию науку, но который собственным искусством в ней прилежно упражнялся, и не такой, напротив того, который хотя великое множество опытов делал, однако, больше желанием великого и скоро приобретаемого богатства поощряясь спешил к одному только исполнению своего желания и ради того, последуя своим мечтаниям, презирал случившиеся в трудах своих явления и перемены, служащие к истолкованию естественных таин.

(必要とされているのは、ただ単に書物を読んでこの学問 [化学] を理解しているような化学者ではなく、独自の技術でもって、たゆみなくこの学問に携わってきたような者なのであり、また、逆に、膨大な量の実験を行っていても、それが多くの富を手取り早く得ようという願望に鼓舞されてなされたものであるために、その欲求を満たすことのみにかまけ、それゆえ、自らの空想ばかりを追い求めているために、実験の中で生じた現象や、自然の神秘を解きあかすために役立つような変化を見逃してしまうような、そのような化学者でもない。)

Не такой требуется математик, который только в трудных выкладках искусен, но который, в изобретениях и в доказательствах привыкнув к математической строгости, в натуре сокровенную правду точным и непоползновенным порядком вывести умеет.

(必要とされているのは、難解な計算のみに長けているような数学者ではなく、命題を見出す際、またそれを証明する際の数学的厳密性を自分のものにした上で、自然のなかに秘められた真実を、精密で、繕ったところのない秩序によって導くことができるような数学者である。)

Бесполезны тому очи, кто желает видеть внутренность вещи, лишаясь рук к отверстию оной. (物体の内部を見ようとするが、それを開く手を持たない者にとっては、目も役に立たない。) Бесполезны тому руки, кто к рассмотрению открытых вещей очей не имеет. (物体の内部を調べるための目を持たない者にとっては、それを開くための手も役に立たない。) Химия руками, математика очами физическими по справедливости назваться может. (人の身体でいえば、化学は手に、数学は目になぞらえることができる。) (..)

Химик, видя при всяком опыте разные и часто нечаянные явления и произведения и приманиваясь тем к снисканию скорой пользы, математику, как бы только в некоторых тщетных размышлениях о точках и линиях упражняющемуся, смеется.

(あらゆる実験の過程において、様々な、そしてしばしば思いもかけない現象や生成物を目にし、それを応用して有益な産物を得ようと没頭する化学者は、数学者を、あたかも彼らが点や線に関する無益な思惟のみに頭を悩ませているかのように、嘲笑している。)

Математик, напротив того, уверен о своих положениях ясными доказательствами и, чрез неоспоримые и непрерывные следствия выводя неизвестные количеств свойства, химика, как бы одною только практикою отягощенного и между многими беспорядочными опытами зablуждающего, презирает и, приобыкнув к чистой бумаге и к светлым геометрическим инструментам, химическим дымом и пепелом гнушается.

(数学者は、逆に、明快な論理で証明された自らの定理に絶対の自信を持ち、次々と連続する現象の結果を論駁できないような仕方でも呈示して、物質量の未だ知られていない特性を導き出す一方で、化学者が、あたかも、ただ単に実地のみを気に向け、多くの無秩序な実験結果を手に入途方に暮れているかのように見下し、自分たちの清潔な紙と光沢を放つ幾何学の計測器具にすっかり馴染んでしまい、化学実験の煙や灰に顔をしかめるのだ。)⁽³²⁾

この引用の中では、形動詞と副動詞の役割が明確に区別されている。形動詞は、もとの動詞の諸特性はそのまま残しながらも、あくまでも名詞を修飾する役割を果たし、副動詞は、動詞定形あるいは不定詞に、副詞節として従属し、主動詞の表す行為に付随する第二義的な行為を表す、といった構文体系上の位置付けが明確になっていることがわかる。

6. 結論

以上の考察を踏まえて、先に述べたこととも重複するが、本稿の結論を短くまとめておきたい。

17世紀後半から18世紀前半にかけてロシア語が実際に変化を蒙っているのなら、その変化は、形動詞構文と副動詞構文に焦点を当てることによってよりはっきりと見えてくるのではないだろうか。また、そのような観点に立つなら、Ломоносовの著作がロシア語に及ぼした影響を再評価することができるのではないだろうか。この二つが、本稿で主張したかった点である。

形動詞構文は、18世紀に盛んに行われた、教会スラヴ語かロシア語かという言語論争のなかでは特に議論の対象となっていないものの、当時の人々からは明らかに非口語的な一従って教会スラヴ語的な一要素とみなされ、17世紀後半から18世紀前半にかけて、ロシア語を基にした標準語を確立しようという動きが盛んになった時期、極めて文語的な著作においてすら関係節などで書き換えられる傾向にあったと思われる。それは詩篇とその改作のような、継続性のあるテキストを比較することによって明らかになった。

Ломоносовは彼の文法書や修辞学のなかで一主に修辞学でいう *periodic sentence* を論じるコンテキストにおいてであるが一教会スラヴ語的要素としての形動詞の用法に何度か言及し、動詞性を明瞭に残すような構文を多用している。それらが上記のような背景のもとで書かれていることを考え合わせるなら、そこには彼の積極的な主張を読みとることができる。

教会スラヴ語における分詞短語尾の同格的・第二述語的用法はロシア語のなかで、ある時期まではおそらくバルト諸語と並行するかたちで独自に発展し、副動詞というカテゴリーを形成してきたと考えられる。現代ロシア語の副動詞構文の用法は、その過程のなかで形作られてきたものであろうが、半述語的な用例は17世紀後半から18世紀前半の文語的な著作にも(頻度はそれほど高くはないにせよ)まだ残っていた。Ломоносовは、18世紀半ば、文法書と修辞学をロシア語で著し、また自ら用例を示すことによって、様々な要素を含み雑多な様相を呈していたこの時代のロシア語にある種の発展の方向性を与えた。

32 Ломоносов М.В. Полное собрание сочинений. Т.2. М.-Л., 1951. С.354-355.

教会スラヴ語や中世ロシア語との継続性に関しては、形動詞・副動詞構文という枠組みをとるなら様々なレベルでの評価ができるだろう。そして、少なくともこの枠組みのなかでは、例えばフランス語がロシア語に与えた影響は、むしろ借用造語のレベルに留まるような、表面的なものだったのではないかと思われる。

**Причастные и деепричастные конструкции во второй половине 17-го
— первой половине 18-го века**
(К истории русского языка нового времени)

МУКАЙЯМА Тамаё

Со второй половины 17-го — до середины 18-го века — это «переломный» период в истории русского языка. Тот, кто читает разные тексты этих времен, чувствует, что именно в это время русский язык пережил резкое изменение. Но до сих пор во многих исследованиях описывают этот период только в общих чертах, и этот перелом объясняется как смещение церковно-славянского, канцелярского и простого русского языков, или как изменение, происходившее под влиянием иностранных языков. И трактовка о том, что М.В. Ломоносов способствовал нормированию литературного русского языка так называемой «теорией трех стилей», принимается как будто постулированная.

Настоящая статья посвящена изменениям в области синтаксиса русского языка нового времени. Здесь автор статьи предлагает обратить внимание на причастные и деепричастные конструкции как признак, показатель синтаксической структуры. Это потому, что именно в этих рамках обнаруживается более заметно, какое имеет отношение русский литературный язык, регламентированный в середине 18-го века, к церковнославянскому, гибридно-церковнославянскому языкам. И такая точка зрения, кажется, позволит дать правильную оценку роли Ломоносова (его стилистики) в регламентации русского литературного языка.

Содержание статьи можно резюмировать следующим образом: для того, чтобы найти отправную точку исследования, в первой главе подвергаются сравнению псалтырь на церковно-славянском и три его переложения, написанные во второй половине 17-го — первой половине 18-го века. В них проявляются следующие общие черты: во-первых, причастные конструкции вполне сознательно переписываются в подчиненную конструкцию, используя различные относительные местоимения. Во-вторых, аппозитивные причастия или заменяются глаголом, или становятся деепричастием. Примечательно то, что в употреблении этих деепричастий существуют разные «аномалии». Отсюда следуют, что в норме употребления деепричастия (особенно когда оно составляет подчиненное предложение) между ц.-сл., гибридно-ц.-сл. с одной стороны, и русским языком 18-го века, с другой, преемственность отсутствует.

В следующей главе показываются такие «аномальные» деепричастные конструкции, а именно:

1. паратактический союз между деепричастием и глаголом;
2. деепричастие с собственным субъектом;
3. относительное местоимение плюс деепричастие;
4. деепричастие как предикат предложения;
5. абсолютное употребление деепричастия.

В третьей главе затрагиваются те же самые «аномалии», но в связи с влиянием французского языка. Опираясь на данные, выписанные из книги G. Hüttl-Folter (<Syntaktische Studien zur neueren russischen Literatursprache>) автор статьи указывает, что и здесь довольно часто встречаются случаи ненормативных употреблений деепричастий (и в зависимости и независимо от французского).

Некоторые (в том числе А.В. Исаченко, G. Hüttl-Folter и др. крупные) ученые считают, что синтаксис русского языка существенным образом изменился в течение 18-го века под влиянием французского. Но, если смотреть этот вопрос в рамках причастных и деепричастных конструкций, становится ясным, что влияние французского языка

осталось поверхностным (как оно ни бросается в глаза).

Как понимать то, что названные «аномалии» нередко встречаются в текстах 18-го века, написанных крайне образованными людьми? В течение 18-го века они становятся ненормативными — но каким же образом?

На эти вопросы, кажется, проливает свет детальное наблюдение А.А. Потебня. Его мысль в последнее время нашла поддержку в работах В.Амбразаса. В четвертой главе коротко излагается тонкое наблюдение А.А. Потебня, сделанное обширным взглядом на языковые явления, насколько она касается темы статьи.

В последней главе речь пойдет о регламентации, сделанной Ломоносовым. Никто не сомневается в том, что «российская грамматика» и «риторика» Ломоносова имеют большое значение в истории русского языка. Но так как он не предлагал теорию, а излагал свою стилистику в виде риторики и на практике, его стилистика часто оценивается только в рамках классицизма.

Но когда читаешь его риторические сочинения, учитывая тогдашнюю пеструю языковую картину, становится очевидным, что в центре стилистики Ломоносова стоит не учение о трех стилях, а та синтаксическая система, в которой четко определена норма употребления причастных и деепричастных конструкций и их стилистическое значение.